慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 会計と会計学の行く末 : 会計学の基本問題〔IV〕 (10) |
| Sub Title | The future of accounting |
| Author | 友岡, 賛(Tomooka, Susumu) |
| Publisher | 慶應義塾大学出版会 |
| Publication year | 2022 |
| Jtitle | 三田商学研究 (Mita business review). Vol.65, No.1 (2022. 4) ,p.1- 11 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | 「みんなを幸せにする会計」をもって求めるところに「会計学者の責任」がある，とされることの意味について思量する。 |
| Notes | 論文 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20220400-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第65巻第１号
2022 年 4 月

2021年２月19日掲載承認

# 会計と会計学の行く末

―― 会計学の基本問題〔Ⅳ〕(10) ――

友　岡　　賛

＜要　　約＞
「みんなを幸せにする会計」をもって求めるところに「会計学者の責任」がある，とされることの意味について思量する。

＜キーワード＞
学者，金融資本主義，経済的格差，原則主義，公益，幸せ，実学，実務，資本主義，社会科学，誠実性，判断，プロフェッショナリズム，プロフェッション，有用性，利益，理論，倫理

## みんなを幸せにする会計学者の責任

『会計学者の責任[1]』という書名を目にして些か驚いたのは２年前のことだった。「些か」としたのはその著者の名前をみて，さもありなん，と思ったからだったが，しかし，いずれにしても，些か違和感を覚え，即座に「会計学者は責任を問われるのか[2]」という問い掛けをなした。

「「みんなを幸せにする会計」を求めて[3]」という惹句が目を惹き，序文の１行目が「学者の役割[4]」に始まる書を手にしたのはさらに２年前のことだった。その著者の人となりからして驚きこそなかったが，しかし，「「みんなを幸せに」かぁ」という独り言ちは禁じえなかった。

俎上に載せられているのは学者の役割・責任なのか，はたまた会計学者の役割・責任なのか。

---

＜引用について＞
原文における（　）書きや太文字表記や圏点やルビの類いは，原則として，これを省略した。したがって，引用文におけるこの類いのものは，特に断りがない限り，筆者（友岡）による。
また，引用に際して，旧字体は，原則として，これを新字体に改め，促音や拗音の類いが小文字表記されていない場合は小文字表記に改め，漢数字は多くの場合，算用数字に改めるなどの加筆を施している。

1）渡邉泉『会計学者の責任――歴史からのメッセージ』2019年。
2）友岡賛『会計学の地平』2019年，192頁。
3）黒川行治『会計と社会――公共会計学論考』2017年，帯およびそで。
4）同上，ｉ頁。

普遍的な論なのか，はたまた会計学者固有の論なのか。

会計学は特殊か。会計学の特殊性は何か。

いずれの学問分野にも，固有の何か，特殊性の類いはあろう。○○学には○○学の特殊性があり，△△学には△△学の特殊性があり，会計学には会計学の特殊性があろう。

しかし，如上の「特殊性」は（いずれの分野にも，という意味において）普通の特殊性だろう。会計学には特殊な特殊性があるのだろうか。

敷衍するに，会計学・会計学者の役割・責任の論は「特殊性」の論なのか，はたまた「特殊な特殊性」の論なのか。

「「みんなを幸せにする○○」を求めて」といわれると，「○○」が何であろうとも，「みんなを幸せにする」には抗しがたいだろう。前出の「会計学者の責任」の論者も同様に「みんなを幸せにする」をもって問題とし，すなわち14世紀に「技法（アート）として完成[5]」をみた複式簿記は19世紀に「科学（サイエンス）として確立[6]」，「それが社会科学としての会計学[7]」とされ，社会科学は「大多数の人を幸せに導くための学問でなければならない[8]」とされ，そこに「会計学者は，その責任を問われなければならない[9]」としているが，これは社会科学者一般の責任であって，会計学者固有の責任ではないだろう。

## 実学

ところで，これは会計学に限ったことではないが，実学と捉えられることが少なくない[10]という点は会計学の特徴の一つだろうし，この点は上の引用における「技法」と「科学」にもかかわる。「Is accounting an art or a science?」という問い掛けが屢々なされ，これはジョージ O. メイ（George O. May）の「会計は技術である。それは科学ではない（It is an art, not a science）[11]」という言に由来する[12]ともされ，この「art」は実学に通じようか。むろん，繁く「実学」の語とともに引き合いに出される福澤諭吉の用いる「実学」はこれが「science」の訳であることは看過しえない[13]が，けだし，会計学について一般にいわれる「実学」は実務・実践と結び付いた学問といっ

---

5）渡邉泉「会計学者の責任――歴史からのメッセージ」『産業經理』第78巻第２号，2018年，11～12頁（ルビは原文）。

6）同上，12頁（ルビは原文）。

7）同上，12頁。

8）同上，12頁。

9）同上，12頁。

10）田中弘『GDP も純利益も悪徳で栄える――賢者の会計学・愚者の会計学』2016年，「読者の皆様へのメッセージ」５頁。
八田進二『会計。道草・寄り道・回り道』2018年，16頁。

11）G. O. メイ／木村重義（訳）『財務会計――経験の蒸留』1957年，３頁。
George O. May, *Financial Accounting: A Distillation of Experience*, 1943 p. 1.

12）神森智「二つの会計学――実務者会計学対研究者会計学」『松山大学論集』第30巻第４－２号，2018年，６頁。

13）ただし，「福澤は，いわゆる金勘定の話は学者にする話ではない，とまで言っている」（池田幸弘「福澤諭吉と経済という言説――新旧両理念のはざまで」『三田評論』第1252号，2021年，76頁）一方，「狭い意味での経済学的な言説だけではなく，簿記や会計，財務のような広い意味では経済に関係がある言説が福澤の思↗

た意味だろうか。

「実務に携わる学者は不純だ」[14]などといった学界の声を否定し，「こと会計および監査の領域の場合……より良き実務を支えるために求められる会計・監査研究こそ」[15]が求められるとする向きがあり，あるいは「書斎の会計学」[16]を否定し，すなわち「「学の世界では原理原則を」，「実務界ではその応用を」」[17]といった行き方を否定する向きがある。「会計理論と会計実務は不可分の関係にあるものである（are inseparably connected）から，両者とも独自に存在することはできない」[18]という A. C. リトルトン（A. C. Littleton）の言も引かれる。[19]

ただしまた，しかしながら，わが国の会計の場合，「学界と実務界との関係は極めて薄弱」[20]ともされ，また，「（学者による）会計関係の論文・書籍は，ほぼ例外なく，「会計学は実学」とばかり，「会計実務は会計の教科書に書いてある通りに実践されている」という認識のもとに書かれている」[21]と批判する向きもあるが，「「会計学は実学」とばかり」とはどういうことか。会計学者は実学を志向しているのか。

「書斎の会計学」の批判者は「理論と実務が遊離している……実情」[22]をもって批判しているが，この「遊離」の「実情」は，けだし，「IFRS（International Financial Reporting Standards）（国際財務報告基準）の世界」[23]においては自ずと解消に至る筋合いにあるのかもしれない。IFRS の今後は未だ定かではないが，IFRS の世界は「「原則主義」を基本理念とする」[24]とされ，この理念は実務において判断を求める。もっとも，他方，「IFRS では「実現」を全否定して，すべて「発生」概念で構築しようとしている」[25]とされ，「そこでは会計的裁量が不可避である」[26]とされ，ここでの「裁量（判断し，処理すること）」は専らネガティブに捉えられているが，[27]しかし，判断を求める原則主義は，むろん，まずは原則を求め，原則はこれを理論がもたらす，という筋合いにある。

---

↘ 想の中に占める割合は低くはなかったのではないか」（同上，85頁）ともされる。あるいは「諭吉は……実践的な知識の重要性についても認識していた。その１つは簿記であり，あと１つは医学であった」（菅陽子「大学における会計教育と日本の経済発展」高田敏文（編著）『会計・監査研究の展開』2021年，43頁）ともされる。

14）八田『会計。道草・寄り道・回り道』16頁。
15）同上，16頁。
16）田中『GDP も純利益も悪徳で栄える』４頁。
17）同上，４頁。
18）A. C. リトルトン／大塚俊郎（訳）『会計理論の構造』1955年，３頁。
A. C. Littleton, *Structure of Accounting Theory*, 1953, p. 1.
19）神森「二つの会計学」６頁。
20）八田『会計。道草・寄り道・回り道』193頁。
21）田中『GDP も純利益も悪徳で栄える』５頁。
22）同上，「読者の皆様へのメッセージ」５頁。
23）八田『会計。道草・寄り道・回り道』43頁。
24）同上，43頁。
25）田中『GDP も純利益も悪徳で栄える』141頁。
26）同上，141頁。
27）「極端なことを言うと，決算は企業の思いどおりにできる」（同上，141頁）。

**資本主義と会計の危機**

如上の論は資本主義と会計の関係にかかわる。

この関係についてはまずは複式簿記と利益の関係[28]が言及される。よく引かれるヴェルナー・ゾンバルト（Werner Sombart）によれば，「複式簿記なくして資本主義というものをかんがえることはできない[29]」とされ，「複式簿記以前のこの世には，資本というカテゴリィが存在しなかった[30]」とされる。

「資本というカテゴリィ」は利益の把捉とともにあり，例えば次のように説明される。

> 「複式簿記のおかげで商人は，それまで個人の肌感覚としてとらえていた「利益」なるものを計算・記録するシステムを手にし，利益を追求することができるようになった。……複式簿記によって利益が「見える化」されたのである。……利益が「見える化」された結果，富を蓄積することができるようになり，余剰な資本を次の投資に充てることができるようになる[31]」。

しかしながら，如上の複式簿記は「「利益を見える化」する一方で，企業倫理とか経営の健全性，個人の幸福といったことが軽視される一因となった[32]」ともされているが，他方，「みんなを幸せにする会計」の論者によれば，「資本主義が問題[33]」ともされ，「近代資本主義社会の背景にある形式的功利主義，営利主義，そして発展至上主義的な行動原理の蔓延[34]」が問題視される。この論者は「社会科学の研究者の有り方を少しく省みて云々[35]」としつつも，会計学についてはその対象は利益計算システムであって，「利益計算システムとしての会計は，効率性測定の最有力な手段であると看做されてきた[36]」が，「「社会全体の効率性増進が社会的目標へと横滑る（そのまま社会的目標になる）」ことに疑問が湧いた[37]」彼は，けだし，専ら資本主義に資する会計と会計学の再考を志向するに至る。

「みんなを幸せにする」会計学と「みんなを幸せにする」社会科学の関係は，会計学は社会科学だからこそ「みんなを幸せに」ともされる。「会計学者の責任」の論者によれば，「会計学は，単なる技法ではなく，社会科学の一分野である[38]」とされ，「社会科学の役割は，ごく一部の富める人のためではなく，社会を根底から支えている大多数の人を幸せに導くための学問でなければ

---

28）友岡賛『歴史にふれる会計学』1996年，84～85頁。
29）同上，84頁。
30）同上，85頁。
31）田中『GDP も純利益も悪徳で栄える』95頁。
32）同上，147頁。
33）黒川『会計と社会』10頁。
34）同上，18頁。
35）同上，ⅰ頁。
36）同上，ⅳ頁。
37）同上，ⅴ頁（（　）書きは山浦久司「黒川行治著『会計と社会　公共会計学論考』（書評）」『会計・監査ジャーナル』第30巻第４号，2018年，82頁）。
38）渡邉「会計学者の責任」12頁。

ならない[39]」とされ，「金融資本主義に加担する現行会計制度[40]」が俎上に載るに至る。すなわち，槍玉に挙げられるのは公正価値会計であって，「金融資本主義を支える公正価値会計が……貧富の差の拡大によって，差別や犯罪や紛争を生み出している[41]」とされ，「利益追求至上主義，あるいは有用性至上主義の制度や基準を見直すことが強く望まれる[42]」とされる。こうした公正価値会計の否定については「公正価値会計がどのような経路によって，経済的格差の増幅に結びついているのかという論理が不明確であ[43]」り，「公正価値会計の導入と経済的格差の拡大との間に相関関係は確認されるものの，因果関係がわかりにくい[44]」という批判的な指摘があるが，他方，利益至上主義の否定は例えば「「幸福と会計」という独自（？）のテーマを追い続けている[45][46]」と評される別の論者においてもなされ，「かつて利益の拡大は幸福に直結した[47]」が，「今日，以前に前提されていたような「利益」と「幸福」の正の連関性は薄い[48]」とされ，「これまでの「利益」最大化を動機メカニズムのコアとする利益計算会計制度は終焉する可能性がある[49]」とされ，「ボトムラインの「利益」を最大化して超過利益を求める投資家や株主を優遇する政策は社会の主観的幸福感を増進しない[50]」ため，とされる。あるいは「国民あるいは全世界にとって，彼らの幸せにつながらない会計は終焉する[51]」とされ，「売上や利益が伸びても幸福感が伴わなくなれば，いつか，人は，会計などどうでもよくなる[52]」とされる。

「会計などどうでもよくなる」ということは，会計に何も期待しなくなる，ということか。「期待」というと，監査における期待ギャップが想起される。これには監査人がすべきことをしていないことによるギャップもあれば，監査に対する世間の期待に誤解ないしずれがあることによるギャップもある。ただし，後者については「たとえそれが困難なことであっても，社会の期待に応えない，という選択は，ならば社会にとって公認会計士は不要である，という批判に結果しかねない[53]」とされ，あるいは「監査人と財務諸表利用者の双方における「監査に対する認識の相違」といった[54]」捉え方を「消極的ないしは後ろ向き的な対応[55]」と批判し，「経済社会における業

39）同上，12頁。
40）渡邉泉『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』2020年，77頁。
41）同上，180頁。
42）同上，192頁。
43）野間幹晴「渡邉泉著『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』（書評）」『會計』第199巻第２号，2021年，114頁。
44）同上，114頁。
45）大石桂一「財務会計研究の将来を考える」『會計』第197巻第１号，2020年，９～10頁。
46）ただし，本稿がみてきているように「独自」とはいえないだろう。
47）鈴木智英「『会計と幸福』――準需要飽和・準完全競争下の〈経済〉社会のアカウンティング」『企業会計』第71巻第１号，2019年，99頁。
48）同上，97頁。
49）スズキトモ「制度設計のナッジとしてのアカウンティング」『會計』第197巻第１号，2020年，64頁。
50）同上，63頁。
51）伊藤邦雄，鈴木智英「果たして「会計の再生」は可能か（対談）」『企業会計』第70巻第12号，2018年，26頁（鈴木談）。
52）同上，26頁（鈴木談）。
53）吉見宏「会計専門職とその監査が直面する危機――公認会計士に求められる判断」『企業会計』第71巻第１号，2019年，82頁。

務ないしはそれを担う職業が存在意義を有するのは，社会の人々が抱く期待ないしは要求を満たしてくれるとの思いがあるからであり，それが満たされない場合には，結果的に淘汰されるのは世の必然[56]」と断ずる向きもある。「淘汰される」ということはただ除かれるのか，それとも，ほかの何かに取って代わられるのか。「どうでもよくなる」とされ，期待されなくなった会計はただ除かれるのか，それとも，ほかの何かに取って代わられるのか。

あるいは期待を維持（回復）すべく変わるのか。変わるべきなのか。しかし，どこまで変わったら，会計が会計でなくなるのか。「会計は説明である[57]」といった類いの定義なら，かなり会計のままでいられるかもしれない。「幸福と会計」の論者によれば，「今後……必要とされるのがビッグデータやAIの技術を援用した新しいAccounting（説明―行為）である[58]」とされる。複式簿記という要件を捨て，貨幣数値という要件を捨て，定量という要件を捨て，あるいはまた，複式簿記という制約を解き，貨幣数値という制約を解き，定量という制約を解き，しかし，それでもなお会計であり続けるのか。幸せを扱うのは会計の仕事なのか。淘汰されないために幸せを扱うのか。「かつて」のように「幸福に直結」しない利益，その計算は要らなくなるのか。

閑話休題。金融資本主義を批判する「会計学者の責任」の論者は「会計の原点に立ち返る[59]」べきとし，「有用性アプローチに代わる信頼性アプローチ[60]」の採用を提唱し，次のように結ぶに至る。

> 「会計学の原点である信頼性の回復に向けた新たな代替アプローチを提示していかなければならない。利益追求という際限のない欲望が……人の心を壊し，会計学を壊してしまう前に[61]」。

金融資本主義が「会計学を壊してしまう」とはどういうことか。壊される，ということはこれを次のように「終焉」，あるいは「死」と述べる向きもある。

> 「行き過ぎた資本主義への修正，あるいは「良き資本主義」の実現に向けて，会計人は何ができるのかが問われている。そうした発想と使命感なくしては，会計は……「終焉」あるいは座して「死」を待つしかないのかもしれない[62]」。

---

54）八田『会計。道草・寄り道・回り道』102頁。
55）同上，103頁。
56）同上，103頁。
57）友岡賛『会計学原理』2012年，51頁。
58）鈴木「『会計と幸福』」103頁（（　）書きは原文）。
59）渡邉『原点回帰の会計学』176頁。
60）同上，181頁。
61）同上，192頁。
62）伊藤邦雄「会計は「終焉」か，それとも「再生」か――ガバナンス改革の進化の視点から」河崎照行（編著）『会計研究の挑戦――理論と制度における「知」の融合』中央経済社，2020年，47頁。

この向きは会計の終焉の虞に危機感を抱きつつ，終焉の回避，すなわち会計の再生を論じており[63]，「従来の意味での「会計」はもはや有用性（レリバンス）を喪失しつつある[64]」との認識の下，「会計が企業評価に有用な情報を提供することが使命であり，かつその使命を果たし続けるためには，会計（学）は今後は非財務情報を自らの領域として取り込む必要がある。……会計が企業価値の評価に有用な「情報」を提供することとする目的観に立ち，それを維持するとすれば，会計は財務情報のみを扱うのではなく，非財務情報も主たる対象とすることになろう[65]」とする。もっとも「会計だけでなくて，非財務情報を含めた情報開示の制度設計も検討していくべき[66]」といった記述もみられ，会計の範疇と非財務情報の関係の捉え方に些かぶれもみられるが，それはさて措き，この「会計の再生」の論者は「これは会計の「拡大主義」を迫るものではない[67]」としつつも，「財務指標と非財務指標のインテグレーションを図る[68]」という行き方をもって提案，しかしながら，他方，「会計学者の責任」の論者は「有用性偏重から生じてくる様々な矛盾[69]」を認識の上，「金融資本主義からの脱却を志向するための会計学のあり方について論じ……そのためには原点回帰が必要[70]」とする。

片や有用性の維持（回復）を志向して非財務情報への「拡大」を提唱，片や有用性を批判して「原点回帰」を提唱，と対照的ながら，会計の終焉の虞に対する危機感は共通しているが，この危機感は，会計学者であるがゆえの危機感，なのだろうか。「幸福と会計」の論者は「いつか，人は，会計などどうでもよくなる」としていたが，「どうでもよくなる」ことに対する危機感は，会計学者であるがゆえの危機感，なのだろうか。

なお，有用性に対する態度については叙上の二つのいずれでもない立場もみられ，すなわち，喪失しつつある有用性の回復を目指すのではなく，また，有用性の追求を批判するのでもない立場もみられる。すなわち，この向きによれば，如上の「会計の危機[71]」は「現代の会計の目的が，資本市場における投資意思決定有用性にのみ向かっている[72]」ことがその原因とされ，ただし，「よく言われる意思決定有用性 vs. 信頼性という対立構図を想定し，意思決定有用性ではなく信頼性を最重要視する方向に舵を切るべきだ，という見解は[73]」これが採られることはない。いわく，「意思決定有用性そのものが問題というより，資本市場における投資のみを想定した意思決定有用性に問題があるのである[74]」。

---

63）同上，20頁。
64）同上，41頁（(　) 書きは原文)。
65）同上，41頁（(　) 書きは原文)。
66）伊藤，鈴木「果たして「会計の再生」は可能か（対談)」36頁（伊藤談)。
67）伊藤「会計は「終焉」か，それとも「再生」か」47頁。
68）同上，47頁。
69）渡邉『会計学者の責任』128頁。
70）小栗崇資「渡邉泉著『会計学者の責任――歴史からのメッセージ』（書評)」『會計』第196巻第３号，2019年，105頁。
71）戸田龍介「継承・発展すべき会計思考についての一考察」『會計』第199巻第１号，2021年，64頁。
72）同上，65頁。
73）同上，65頁。
74）同上，65頁。

「行き過ぎた資本主義」については，「会計の再生」の論者によれば，「市場経済において各個人が自己の利益を追求すれば，結果として社会全体において適切な資源配分が達成される[75]」とするアダム・スミス（Adam Smith）のパラダイムと「企業の社会的責任は（株主への）利益の最大化である[76]」とするミルトン・フリードマン（Milton Friedman）のパラダイム，この「２つのパラダイムに支えられた資本主義の行き過ぎ[77]」とされており，如上のスミスのパラダイム批判は前出の「社会全体の効率性増進が社会的目標へと横滑ること」への「疑問」に通ずるものがあり，また，「個別企業にとって「利益」と考えるものが，合計して「社会の利益」とならないかもしれない……。これは，社会的な観点から会計の利益を見直す必要があるかもしれない，ということではない[78]」か，といった指摘にも繋がろう。

**倫理**

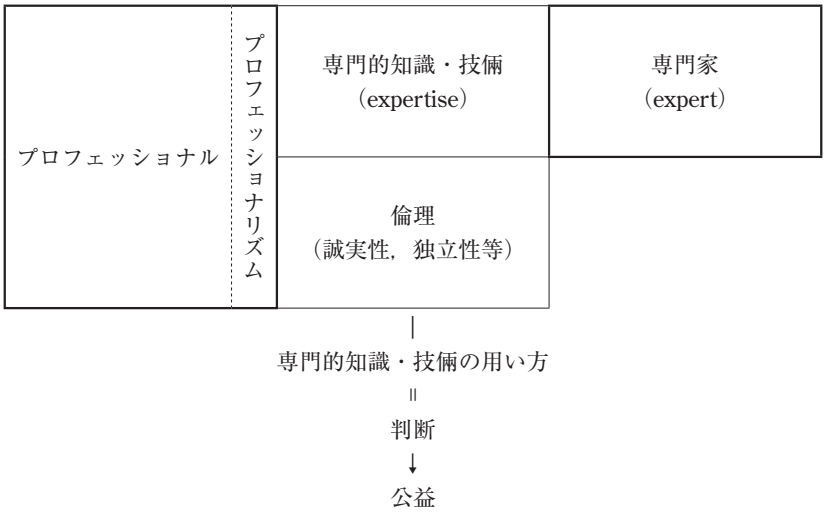
ただし，「会計学者の責任」の論者の近著[79]については「スミスの著書（『道徳感情論[80]』および『国富論[81]』）との類似性[82]」が指摘され，「みんなを幸せにする会計」の論者もスミスの書を多く引く[83]。ただし，視点はいずれも「倫理観[84]」にあり，ただし，倫理観の要求は会計学固有のことでもなく，社会科学固有のことでもなく，科学一般のことだろうし，また，学者の倫理と実務家の倫理の関係はどのように捉えるべきか。わが国における会計プロフェッション論の先駆をもって自任する[85]或る論者によれば，「「倫理」……がなくては「プロフェッション」とはいえない[86]」ともされる。

プロフェッションにおける倫理については公益とプロフェッショナリズムの関係が問題となる。結論からいえば，公益のために専門的知識・技倆と倫理を結び付けるものがプロフェッショナリズムといえようか[87]。

会計プロフェッションに限らず，そもそもプロフェッションというものは，公益のため，ということを自身の目的に掲げ，これがプロフェッショナリズムに繋がる[88]が，プロフェッションの専門性と倫理の関係については，プロフェッショナリズムは専門的知識を，規則のなかにではなく，人のなかに置き，したがって，プロフェッショナリズムはこれによって知識と倫理を関係付ける

75）伊藤「会計は「終焉」か，それとも「再生」か」43頁。
76）同上，43頁（（　）書きは原文）。
77）同上，43頁。
78）田中『GDP も純利益も悪徳で栄える』37頁。
79）渡邉『原点回帰の会計学』。
80）*The Theory of Moral Sentiments*, 1759.
81）*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776.
82）野間「渡邉泉著『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』（書評）」112頁。
83）黒川『会計と社会』243～247，304～305頁。
84）野間「渡邉泉著『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』（書評）」113頁。
　　黒川『会計と社会』246～247頁。
85）八田『会計。道草・寄り道・回り道』33～34頁。
86）同上，112頁。
87）友岡『会計学原理』183～185頁。
88）同上，177頁。

**図１　公益と倫理とプロフェッショナリズム**




ことができる，ともされ，また，この関係を会計制度の在り方に関する［規則主義vs.原則主義］の議論とかかわらしめて考えれば，原則主義は専門的知識を人のなかに求め，すなわちプロフェッショナリズムを必要とする，ということになるともされる[89]。すなわち，前出の「IFRSの世界」はプロフェッショナリズムを求める。

プロフェッショナリズムを求めるということは倫理を求めるということであって，倫理は専門的知識・技倆の用い方に作用し，用い方の問題は判断の問題にほかならない。倫理をもって専門的知識・技倆を用いる，ということは，プロフェッショナルの判断が行われている，ということを意味する。

如上の関係は**図１**[90]のようにまとめられる。

「みんなを幸せにする会計」の論者は「学者としての職業倫理[91]」について述べており，「専門研究者としての技術的および倫理的基準を遵守[92]」すること，「公益を尊重し，公益に繋がると思われる方法で活動する[93]」こと，「最高度の誠実さ[94]」をもって学者に求める。「誠実さ」は倫理の要（かなめ）であって，会計プロフェッションについても「公共の利益に対する「誠実性」を重視し，それを常に高いレベルで発揮し続けようとする心のあり方[95]」が求められる。他方，今後の会計プロフェッションについて，AIに取って代わられないための「社会的判断の必要性[96]」をもって指摘

89）Matthew Gill, *Accountants' Truth: Knowledge and Ethics in the Financial World*, 2009, pp. 99-100.
90）友岡『会計学原理』184頁。
91）黒川『会計と社会』ii頁。
92）同上，ii頁。
93）同上，ii頁。
94）同上，iii頁。
95）柴谷哲朗「誠実性（Integrity）」『企業会計』第73巻第３号，2021年，14頁。

する向きは「そこで行われている……会計実務が……今後の人類社会の発展に必要なことなのか，人間をより豊かにし，幸福につながるものなのかの判断が求められる[97]」とする。

「公益」，「誠実」，「幸福」……いずれの語も，抗いがたい響きをもつ。「会計学者の責任」の論者は「会計の果たすべき究極の役割[98]」をもって提示しているが，決め付けの「べき」論には論理的な反論の余地がなく，また，「みんなを幸せにする」にはやはり抗しがたい。

## 文　献


Matthew Gill, *Accountants' Truth: Knowledge and Ethics in the Financial World*, Oxford University Press, 2009.

八田進二『会計。道草・寄り道・回り道』泉文堂，2018年。

池田幸弘「福澤諭吉と経済という言説――新旧両理念のはざまで」『三田評論』第1252号，2021年。

伊藤邦雄「会計は「終焉」か，それとも「再生」か――ガバナンス改革の進化の視点から」河﨑照行（編著）『会計研究の挑戦――理論と制度における「知」の融合』中央経済社，2020年。

伊藤邦雄，鈴木智英「果たして「会計の再生」は可能か（対談）」『企業会計』第70巻第12号，2018年。

神森智「二つの会計学――実務者会計学対研究者会計学」『松山大学論集』第30巻第４－２号，2018 年。

黒川行治『会計と社会――公共会計学論考』慶應義塾大学出版会，2017年。

A. C. Littleton, *Structure of Accounting Theory*, American Accounting Association, 1953.

A. C. リトルトン（A. C. Littleton）／大塚俊郎（訳）『会計理論の構造』東洋経済新報社，1955年。

George O. May, *Financial Accounting: A Distillation of Experience*, Macmillan, 1943.

G. O. メイ（G. O. May）／木村重義（訳）『財務会計――経験の蒸留』ダイヤモンド社，1957年。

野間幹晴「渡邉泉著『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』（書評）」『會計』第199巻第２号，2021年。

小栗崇資「渡邉泉著『会計学者の責任――歴史からのメッセージ』（書評）」『會計』第196巻第３号，2019年。

大石桂一「財務会計研究の将来を考える」『會計』第197巻第１号，2020年。

柴谷哲朗「誠実性（Integrity）」『企業会計』第73巻第３号，2021年。

菅陽子「大学における会計教育と日本の経済発展」高田敏文（編著）『会計・監査研究の展開』同文舘出版，2021年。

スズキトモ「制度設計のナッジとしてのアカウンティング」『會計』第197巻第１号，2020年。

鈴木智英「『会計と幸福』――準需要飽和・準完全競争下の〈経済〉社会のアカウンティング」『企業会計』第71巻第１号，2019年。

田中弘『GDP も純利益も悪徳で栄える――賢者の会計学・愚者の会計学』税務経理協会，2016年。

戸田龍介「継承・発展すべき会計思考についての一考察」『會計』第199巻第１号，2021年。

友岡賛『歴史にふれる会計学』有斐閣，1996年。

友岡賛『会計学原理』税務経理協会，2012年。

友岡賛『会計学の基本問題』慶應義塾大学出版会，2016年。

友岡賛『会計と会計学のレーゾン・デートル』慶應義塾大学出版会，2018年。

友岡賛『会計の歴史（改訂版）』税務経理協会，2018年。

友岡賛『日本会計史』慶應義塾大学出版会，2018年。

友岡賛『会計学の考え方』泉文堂，2018年。

友岡賛「会計と会計学のレーゾン・デートル」『企業会計』第71巻第１号，2019年。

友岡賛『会計学の地平』泉文堂，2019年。

友岡賛「会計ファームはプロフェッショナルに徹するべき」『Best Professional Firm 2020』プレジデント社，2020年。

友岡賛「コロナ禍と会計――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（５）」『三田商学研究』第63巻第３号，2020年。


96）吉見「会計専門職とその監査が直面する危機」85頁。

97）同上，86頁。

98）渡邉『会計学者の責任』179頁。

友岡賛「「複式簿記」を説明することの意味――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（1）」『三田商学研究』第63巻第5号，2020年。
友岡賛「資本維持の論拠――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（2）」『三田商学研究』第63巻第6号，2021年。
友岡賛「引当金と繰延資産――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（3）」『三田商学研究』第64巻第1号，2021年。
友岡賛「会計主体論の存在意義・再論――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（4）」『三田商学研究』第64巻第2号，2021年。
友岡賛「会計情報の「比較可能性」の意義――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（6）」『三田商学研究』第64巻第3号，2021年。
友岡賛「会計のフロンティアの果て――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（7）」『三田商学研究』第64巻第4号，2021年。
友岡賛「学説・理論の現代的意義の意義――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（8）」『三田商学研究』第64巻第5号，2021年。
友岡賛「会計言語論の意義――会計学の基本問題〔Ⅳ〕（9）」『三田商学研究』第64巻第6号，2022年。
渡邉泉「会計学者の責任――歴史からのメッセージ」『産業經理』第78巻第2号，2018年。
渡邉泉『会計学者の責任――歴史からのメッセージ』森山書店，2019年。
渡邉泉『原点回帰の会計学――経済的格差の是正に向けて』同文舘出版，2020年。
山浦久司「黒川行治著『会計と社会　公共会計学論考』（書評）」『会計・監査ジャーナル』第30巻第4号，2018年。
吉見宏「会計専門職とその監査が直面する危機――公認会計士に求められる判断」『企業会計』第71巻第1号，2019年。

2021年2月19日成稿